令和３年度第２回瀬戸市生活支援・介護予防サービス提供主体等協議体会議　議事録

開催日時	令和３年１０月２５日（月）午後２時から午後３時３０分まで
参 加 者	委　員：別紙委員名簿のとおり 事務局：高齢者福祉課長（司会）、高齢者福祉課長補佐兼地域支援係長、担当主事２名
場　　所	やすらぎ会館　５階　大会議室
内　　容	１　開会 ・資料の確認 ・本日の検討事項について 第１回の会議で決定した、課題「コロナ禍でのつながりの希薄」の解決に向けて、「新しい生活様式に合わせた外出機会の創出」について検討する。 ・委員長からの挨拶 ２　議事 ⑴　令和３年度生活支援コーディネーター活動報告 【資料１】基に事務局から説明。 〈説明内容〉 令和３年度の進捗状況と、活動から見えた課題について報告。 ①　瀬戸市全域（第１層）：Google マップを活用した地域資源マップ（地域ささえあい MAP）を、社会福祉協議会ホームページに掲載した。掲載にあたり認知症地域支援推進員から、「認知症カフェへの行き方がわからない」という意見があったため、今後はニーズに合わせて Google マップに移動手段等も表示されるようにしていく。 令和２年度に作成した地域資源マップ「つながりやっぱりおもいやり」を今年度も継続して作成するために、引き続き地域資源の把握、情報収集を行い、地域課題の解決のために活用していく。 地区社協会長連絡会に参加し、地区社協の事業実施状況を確認したところ、従来の敬老会のやり方を見直す地域が多く見受けられた。今後は、地区社協が活用できる制度の案内に加え、地域課題の解決のために、他団体とのマッチング支援を行っていく。 ②　ふたば（第２層）：水南連区で、裁縫が得意な高齢者と、障害のある方からの服のリメイクの依頼をマッチングした。今後も担い手と地域ニーズをマッチングできるよう、仕組みづくりを検討していく。 地域包括支援センターから、６５歳以上を対象とした特典や割引情報をまとめた資料作成の提案があったため、ドラッグストア等でのサービスを調査している。高齢者の外出のきっかけともなるため、今後とりまとめて、必要に応じて他地域にも展開していく。 よりどころでは、コロナの影響を受け、屋外で開催したり二部制にする等の工夫をする場所があった。また、新しいつながり方として、電話を活用した安否確認を行っている町内もあった。地域住民からはサロンの再開を望む声が多くあったため、新しい生活様式に合わせたつながりの在り方を検討す

るとともに、活動状況についても継続して把握していく。

③　しなの（第２層）：東明地区社協では、高齢者向けに飲料会社の管理栄養士が講師をする健康教室の実施を進めた。第１回はコロナの影響で中止となり、第２回は８名の参加者が集まった。地域活動の中止・延期で役員等のモチベーションが低下しているため、地域活動の必要性を伝え、再開に向けて支援する。

しなの地域包括支援センターとの意見交換会で、認知症相談時にすでに症状が悪化しており、対応に苦慮するケースが多くあることを把握した。コロナ禍で地域交流の場が少なくなり、認知症の早期発見・対応につながりにくくなっているため、今後は、地域住民向けに地域の支え合いや見守りの必要性を伝えていく。

④　中央東（第２層）：地域ケア会議に出席していた企業、ドラッグストアから地域貢献したいという話があった。企業では、骨密度の測定や健康講座等を行っており、出張もできるとのことだった。今後は認知症理解の促進について、地域包括支援センターと連携して周知いくとともに、地域貢献についてサロンやよりどころ等にも周知していく。

移動支援事業のアンケートで、男性はホームセンター、女性は大型スーパー等の買い物に行きたいという意見が多くあり、候補先のホームセンターに訪問し、情報提供と意見交換を行った。しかし、人材不足から地域貢献に参加するのが難しいという現状があった。今後も企業との連携を取りながら進めていく。

〈質疑応答〉

［委員長］から質問。

・　高齢者のマーケティングに乗り出している民間企業はまだ多くはないのか。

［第２層生活支援コーディネーター］から回答。

・　薬局や飲料会社等、高齢者と直接かかわる企業が興味を示している。

［瀬戸地域福祉を考える会まごころ］からの意見。

・　ドラッグストア等が講座を開催しているが、行くまでの移動手段がない。移動支援で解決できるよう考えなければならない。

また、男性はものづくりが得意なので、材料を寄付してスマホ立て等、簡単な工作をお願いすれば、喜んで引き受けてくれるのではないか。貢献したいという気持ちは持っていると感じられる。

［委員長］からの意見。

・　講座を開催している企業は多い。

また、先週参加した地域力推進協議会では、掛川の代表者からたくさん竹が余っていると話があり、連区同士で交流しながら何かできないかという話になった。交流と外出支援を絡められないかと考えている。

［瀬戸市シルバー人材センター］より意見。

・　シルバー人材センターの会員の交流を図るために、女性会員の交流のためのイベントを企画しており、外出支援と地域支援を両立させる。高齢者の中で様々な分野のプロフェッショナルを発掘し、交流することで、一般の方も参加できるコミュニティを作っていきたい。これからはものづくりだけでなく、プラスアルファ（交流など）を検討する必要がある。

［瀬戸市民生委員児童委員協議会］より意見。

・　移動支援事業について教えてほしい。地域の細かいところまで行けるようになるのか。

［事務局］より回答。

・　移動支援事業は、令和２年度から令和４年度までの３か年で、県からの委託事業として実施。道泉地区と東明地区の２か所で実証実験を行う。
行き先については、市内もしくは近隣市町村に限定し、道泉地区、東明地区でのアンケート結果を参考にスーパーやホームセンター等を中心に組み立てていく。

［瀬戸市民生委員児童委員協議会］より意見。

・　認知症の人が実際に歩いていたらどうすればいいか。研修などで、もう少し実例による対応を教えてほしい。

［委員長］より意見。

・　ケースごとの対応がわかるような仕掛けがあるといい。

⑵　令和３年度瀬戸市施策の現状報告

【資料４】を基に事務局から説明。

本市の施策は「高齢者が生きがいをもって安心して暮らせる社会の実現」を基本理念とし、評価の指標として「地域包括ケアシステムの深化・推進」、「認知症施策の推進」を掲げている。（【資料４】４～７頁を参照）

本市の施策の課題として、各事業で孤立しており、つながりが薄いこと、また、地域住民のニーズを拾った事業展開に繋がっていないことがあげられる。今後は生活支援コーディネーターとともに、地域資源と地域ニーズをマッチングすることで、各地域の特性に合わせた事業を展開していく。

〈質疑応答〉

［瀬戸旭医師会］からの質問。

・　認知症本人交流会はうまくいったのか。

［基幹型地域包括支援センター］からの回答。

・　１０月の第２週の金曜日に、認知症の当事者が集まる認知症本人交流会を行った。第１回から多くの人が集まっており、本人たちが不安等を自分の言葉で話し合える会となった。

また、昨日伊吹山で認知症の本人が集まる交流会に参加した。一般的に認知症というと「何もできない」と思われることも多いが、実際には想いや、支援があればそれを実現できるだけの力があると再認識した。

［瀬戸旭医師会］からの意見。

・　認知症の人は後ろ向きで自分から出ることは難しいため、どのように支援するのか気になっていた。このような機会があれば、周りの支援者から参加を促すことができるため、もっと広まっていくと良いと思う。

［瀬戸地域福祉を考える会まごころ］からの意見。

・　認知症の本人は一人で出ていくことが難しい方が多く、必ず支援者が必要。まごころでは支援者のためにケアラーズカフェを開催しており、家族への支援もできるような居場所づくりが大切。
認知症の自覚のない当事者を継続して参加させるのが難しい。支援者側から積極的に声掛けしていくことが大切。また、何かをやりたい認知症の方も多いため、やりたいことができるような居場所づくりをしていくことが重要。

・　居住支援について、最近依頼が急増している。取り壊しになるアパートを追い出された人や車の中で生活していた人が相談に来る。その人たちが一人で自立して生活できるようになるためには様々な関係者の協力が必要。

⑶　地域資源・地域課題の共有

［瀬戸旭医師会］

・もーやっこネットワークを活用した災害時マップを作成している。
寝たきりの人等、要援護者をマッピングしており、来年度あたりには実用化できるかもしれない。

［瀬戸市自治連合会］

・　菱野団地の中で地域住民の集いの場として、「駄菓子屋」「だべりば」を始めた。水曜と土曜の午前中に開催しており、市民同士が出会う機会が増えたという実感がある。１日に３０～５０人くらいの参加があり、その半数が高齢者。瓦版で告知したり、回覧で周知しており、今後も継続して実施していきたい。

［瀬戸地域福祉を考える会まごころ］

・　「だべりば」を担当している。困っている家族もおり、こういった場で発散してもらいたい。対応が難しい場合は、基幹型や病院に共有し、支援している。今後はこの活動を発展させていきたい。

［地区社協会長連絡会］

・　小学生から８０歳まで参加しているバレーボールクラブ活動がある。高齢者は子どもを見て元気をもらっている。また、高齢者だけではなく、若い人も一緒になってできるような活動を発掘したり、人が集まる場を利用し

	て趣味が合う人を見つけてもらいたい。 ニコニコサロンでボッチャを開催したら、とても人気だった。同じ趣味を持つ人を集めることも必要だと感じる。 ［委員長］ ・　多世代の交流やスポーツを行うことは、結果的に高齢者の介護予防や外出機会の創出にも結び付く。 ［第２層生活支援コーディネーター］から回答 ・　社会福祉協議会では、ボッチャやクロリティの貸し出しを行っているので、ぜひ活用してほしい。 ［基幹型地域包括支援センター］から意見 ・　男性はものづくりが好きということから、「ベンチプロジェクト」につなげるのはどうか。これは街中に誰もが気軽に座れるベンチを置くことで、外出の際の休憩スポットに使ってもらい、外出しやすい街づくりにつなげるプロジェクト。ベンチづくりをものづくりが好きな高齢者にお願いすると良いのではないか。 ［瀬戸地域福祉を考える会まごころ］から回答。 ・　今、高齢者と大学生が一緒にベンチを作成している。 ３　その他 事務局より次回の開催と訂正事項の案内 〈説明内容〉 ・　次の会議は来年の２月を予定している。 ・　【資料５】の２頁にある事業名「元気高齢者サポーター養成講座」の令和２年度実施内容に記載がある「ミニデイサービス笑い」は、正しくは「デイサービス笑み」になる。 ４　閉会